島根県立出雲養護学校（令和３・４年度実践モデル校）

「地域で生きる人になるために」
出雲養護学校　人権教育実践モデル校事業２年間の取り組み

１、出雲養護学校について

（１）学校紹介

本校は、出雲圏域で唯一の特別支援学校であり、全校児童生徒２８８人の大規模校である。知的障がい部門、肢体不自由部門、病弱部門の３つの部門があり、寄宿舎と４つの分教室を有している。各学部・分教室等の児童生徒数については、下記の通りである。（令和４年５月１日現在）

本校	小学部	７１
	中学部	３９
	高等部	１２９

大田分教室	小学部	5
	中学部	9
みらい分教室	小学部	10
	中学部	4

雲南分教室	高等部	１４
邇摩分教室	高等部	8

総計	２８８名

（２）令和４年度学校経営プラン

令和４年度の学校経営プランは、次のページの通りである。重点テーマは、「カラフル」～個性を生かして地域とつながろう～であり、これを踏まえて、本校では児童生徒の好きなことや良さを生かした教育活動を行うこと、個性を生かした取組と地域を結びつけた教育活動を意識しながら授業作りを行っている。

令和4年度　出雲養護学校　学校経営プラン

あかるい子　　なかのよい子　　たくましい子

めざす児童生徒像（グラデュエーションポリシー）

地域で生きる人になる

高等部　求める生徒像（アドミッション・ポリシー）

自分の可能性を切り開くことに意欲が持てる生徒

学びの方向性（カリキュラム・ポリシー）

○地域で生きる力の育成
- ・様々な学習や生活の中で活用できる知識の獲得
- ・獲得した知識を活用して課題を解決する力
- ・自己理解を深め、困難に負けず主体的に取り組む力

○12年間を見通したキャリア教育の推進

学校の役割（スクール・ミッション）

出雲圏域の特別支援教育の拠点としての役割
- ・障がいのある子どものキャリア教育の推進
- ・センター的機能（教育相談機能）の充実

重点テーマ「カラフル」～個性を生かして地域とつながろう～

- ・児童生徒の好きなことや良さを生かした教育活動を行うこと
- ・個性を生かした取組と地域を結びつけた教育活動を行うこと

授業からのアプローチ

①知識の理解の質を高める
　知っていることと新しいことを結びつけ、他の学習や生活の場面でも活用できる知識を獲得しよう
②思考力・判断力・表現力等の育成
　獲得した知識・技能を活用して課題を解決する力を育てよう
③学びに向かう力、人間性の育成
　メタ認知を高めることで、困難に負けず主体的に取り組む力を育てよう

①知識・技能　←→（相互関係）　②思考力・判断力・表現力

③学びに向かう力、人間性（①と②を支えるもの）

「知識」の獲得・活用を大切にし、
日々の丁寧な肯定的フィードバックの積み重ねでメタ認知を高めよう

身近な課題を見つけ、知っていることを活用しながら、必要な情報を集めて考える経験を重ねよう（思考力、判断力の育成）

いずようらしさ
　控えめでおとなしいが心の中に「自分」を持っている

教職員集団としてのアプローチ

- ・チームとしての役割分担
- ・それぞれの「得意・持ち味」を生かした授業づくり
- ・学部・部門、寄宿舎、分掌間の情報交換・共通理解

学部・分掌からのアプローチ

- ・カリキュラムマネジメント
- ・積極的な生徒指導
- ・知的障がい教育、肢体不自由教育等についての専門性の向上
- **・ICT機器を効果的に活用した授業づくり**
- ・学校図書館の積極的な活用

保護者・地域との連携によるアプローチ

- ・学校からの情報発信（ホームページ等）
- ・保護者との連携
- ・センター的機能の充実
　保幼小中高の様々な年代への支援
- ・コミュニティセンター等との連携
- ・現場実習先、就労先、就労関係機関との連携
- ・スクールカウンセラー、発達障害者支援センター等との連携
- ・外部講師等の積極的な活用
- ・寄宿舎生のボランティア活動等による連携

○新型コロナウイルス感染症への対応　　マニュアルに基づき安全安心な体制整備と拡大防止への意識を高める
○医療的ケアの円滑な実施
○人権意識の高い教職員集団であること
○シニアリーダー、ミドルリーダー、ヤングリーダーの育成・・・どの年代も「学び続ける教師」であること
○働き方改革　　会議の内容・回数等の精選、ノー残業デーの設定等

２、人権教育実践モデル校重点目標の設定について

（１）重点目標について

人権教育実践モデル校事業　重点目標 **「学校が地域と連携を図りながら　児童生徒が将来を切り開いていく力を育てる** **～地域で生きる人になるために～」**

出雲養護学校では、この２年間の人権教育実践モデル校事業の重点目標を、「学校が地域と連携を図りながら児童生徒が将来を切り開いていく力を育てる」とした。地域について学び、地域と連携した教育活動を通じて仲間と共に育ち合う力を育成し、地域の中で生活していくための基盤を作っていくことを目標とした。また、しまねがめざす人権教育の中では、「校外との連携」「地域ぐるみで学びの環境作り」「地域との連携の輪を広げる」について触れられている。地域と連携した教育活動を進めていくことは、人権教育の柱である「進路保障」とも深く関わり、また知的障がいのある児童生徒が自分らしく生きる「共生社会」の実現にもつながる実践であると考えた。

（２）重点目標を設定した背景①

出雲養護学校は、３つの障がい部門がある上に、小学部から高等部まであるため年齢の幅も広い。また、出雲市は、世界各国との繋がりを大切にしている地域でもあり、外国にルーツをもつ児童生徒が在籍していることも特徴である。

さらに、みらい分教室、邇摩分教室、雲南分教室、大田分教室の４つの分教室がある。みらい分教室は、病弱部門の小学部と中学部があり、当該学年の教育課程で学習をしている。邇摩分教室は、邇摩高校の敷地内にある高等部のみの分教室である。邇摩高校の生徒と日常的に顔を合わせ、学校の行事等を一緒に行うなどの交流がある。雲南分教室には、高等部があり、雲南市の施設と隣接しているため地域の方との交流が盛んである。大田分教室は、大田市立第二中学校の敷地内にある小学部と中学部の分教室である。第二中学校の生徒達とは、日常的に交流があり、体育祭や文化祭などに一緒に参加したり、生徒会を中心にプロジェクトを組んだりして学習をしている。

このように出雲養護学校は、もともと多様な児童生徒が本校や分教室のあるそれぞれの地域と連携しながら教育活動を行っている。このモデル校事業の中で、これまで行われていた実践を人権教育の視点で捉えなおしたいということが重点目標を設定した背景の一つである。

（３）重点目標を設定した背景②

重点目標を設定した背景の２つ目は、令和３年度にしまね特別支援教育魅力化ビジョンが策定され地域と連携した教育の取組が一層推進されたことである。さらに、令和４年度には、本校のグランドデザインが決定し、それに基づいた教育活動が本格的に始まった。

本校のグランドデザインでは、目指す児童生徒像として「地域で生きる人になる」を掲げている。学校が、地域の方々と連携しながら、地域の中で生活していく基盤を作っていくことを目指している。また、本校の個性である多様性を生かし、地域との「共生社会の実現」を進めている。

令和４年度の始めには、人権教育実践モデル校事業の取組は、このグランドデザインに基づくものであり、学校全体で組織的に実践していくことを教員間で共通理解をした。重点目標の中にも、～地域で生きる人になるために～を追記した。この事業の組織及び推進体制は全校体制で取り組み、校内研究や進路支援部、地域連携推進部、各学部・分教室の担当者と連携を図りながら実践を進めた。

３、２年間の実践について

ここからは、校内研修の取組と各学部・分教室の取組の２つに分けて２年間の実践について紹介する。

（１）校内研修

①令和３年度

「人権教育を進めるために　～実践の方向性について～」（人権同和教育課指導主事による訪問指導）

人権同和教育課指導主事が来校し、実践の方向性についての研修を行った。しまねが目指す人権教育の理解を深め、人権教育を進めるための３つの視点について学んだ。それを踏まえ、「子どもの背景を考えるワーク」を実施し、ワークシートを活用して人権教育を進めるための３つの視点に当てはまると思う取組を書き出し、グループで共有して課題や改善点について協議した。

また、人権教育の視点で児童生徒につけたい力や重点を踏まえた授業づくりについて演習を交えながら学んだ。人権教育の視点を取り入れた授業づくりのためには、「何ができるようになるか」を明確にすること、人権感覚の育成（偏見にとらわれず、様々なものの見方ができる力・感性）が大切であることが分かった。誰もが安心して生活できる学校づくりには、授業を含めた学校の教育活動全体を通じて組織的に人権の取組を進める必要があり、人権感覚を高めていく教職員集団の姿が子どもたちに良い影響を与えることに繋がることの理解が深まった。

小学部公開授業　～遊びの指導～

人権教育の視点を取り入れた授業づくりとして小学部３年生の遊びの指導の公開授業を行った。お店屋さんを題材として、仲間と関わって活動する姿を育てる授業づくりをテーマに授業を行った。テーマに迫るために、単元の始まりに高等部食堂班の生徒の交流を行い、児童がお店についてイメージをすることができるようにした。指導助言では、「これまでの研修が生かされ、何を大切にしていきたいのか、共有して授業を進めていた。教員同士の関係性も含めた安心して学べる環境作り、意欲関心を高められるような授業の組み立てが学びの保障につながっていた。」と講評があった。小学部は、授業を通じて、地域と繋がる土台や基盤をつくる時期であり、身近な人との関係づくりや関わりの経験が大切だということを学級や学部の中で確かめることができた。

外部講師による研修

「この子らを世の光に」から学ぶ人権教育　～地域を開き　地域を興す～

大阪成蹊大学　教授　渡部昭男先生

渡部先生は、鳥取大学に在籍時に出雲養護学校の大田分教室の開設後の数年にわたり講演や指導助言をしていただいていた経緯があり、本校の様子についてはよくご存じの先生である。今回は、全教職員を対象に、障がいのある子どもたちがどのような生活をしてきたか、その歴史的背景を紐解き、養護学校義務化に向かって教育保障を訴えてきた糸賀一雄氏の言葉の意味などの話を伺った。「この子」という生きた命、個性のあるこの子の生きる姿とそれを支える教師たちの支援の在り方に感銘を受け、特別支援教育の基本に立ち返って、今何をするべきか深く考えさせられた講演であった。

②令和４年度

人権同和教育課指導主事による訪問指導

人権同和教育課指導主事や教育事務所の人権・同和教育指導員、学校・福祉連携推進教員に来校してもらい、高等部の作業班・地域サービス班が作業学習で実際に活動する様子を見学してもらった。当日は、高等部作業班の「営業日」で、本来であれば地域の方や保護者の方が来校して、作業班の製品の販売、食堂での食事の提供、洗車の実施を行う予定であったが、感染症対策のために営業日は急遽中止となった。そのため地域のお客様は不在であったが、地域サービス班の生徒たちが訪問された方々へ作業班の製品の説明や校舎案内をしたり、食堂班の生徒たちが食事を提供したりすることで、普段の高等部の営業日の様子を見てもらうことができた。

高等部公開授業　　～作業学習　地域サービス班～

高等部の作業学習で地域サービス班の公開授業を行った。題材は、「営業日　地域のお客様に心を込めたおもてなしをしよう」で、午前中に行った「営業日」だんだん食堂 Café でのホール接客や校舎案内について振り返りをする内容であった。質の高いサービスを提供するために各自がプラスワンのおもてなしができたかどうかの振り返りをしていった。「言葉が足りない、分かりにくい生徒に対して、みんなでわかりやすく伝える取り組みをしていた。」「自尊感自己有用感を高めるために、他者評価はとても大事である。」「校舎案内している生徒と授業の生徒とは、いい意味で違っていた。」「接遇について、いろいろ工夫して生徒が自分の物にして行っている。」「実践の裏に理念がある、それを念頭において柱にして取

り組んでいる。」などの講評をいただいた。

外部講師による研修

「多文化共生とやさしい日本語について」

多文化“結”の会　　代表　堀西雅亮　氏

堀西氏は、今年度よりいずよう魅力化協議会（学校運営協議会）の委員として本校の教育活動に関わっている方であり、お寺の住職の傍ら、地元出雲市を中心に外国にルーツをもつ子どもや出雲の企業で働く方々のサポートや居場所づくりの活動を行われている。今回は、多文化な社会である出雲市の現状や言葉や文化の分からない不安を当事者の言葉を紹介しながらお話いただいた。「外国人」と「日本人」で線を引くのではなく「もともと多様な私たち」がともに安心して生きることができる社会をつくっていくことが「多文化共生」になることを考えることができた。この共生社会を目指す取組は、障がいのある子どもたち一人ひとりが地域社会で安心して生きていくための社会づくりとも重なり、特別支援学校と地域との関係性についても深く考えさせられた。

校内夏期研修会

夏期研修の中で、グランドデザインの目指す児童生徒像「地域で生きる人になる」ために小学部・中学部・高等部のそれぞれの段階での児童生徒の「目指す姿」について話し合うグループワークを行った。全校を各学部、分教室、寄宿舎の先生が混合した１４グループに分けて、小・中・高の生活年齢に応じて育てたい力や目指す児童生徒像のつながりを考える場を全教職員でもった。このことは、人権教育実践モデル校事業の重点目標である「学校と地域の連携や将来を切り開く力の育成」にもかかわるものとなった。また、小・中・高の目指す姿のつながりを考えることは、キャリア教育の視点でグランドデザインの「地域で生きる人になる」を捉え直すことにもつながった。

（２）各学部・分教室の取組　　～地域をキーワードにした授業実践～

小学部　～神西小学校との交流学習～

小学部では、交流及び共同学習を大切にしており、同じ地域にある神西小学校とは今年度で３８年目になる交流を行っている。同じ地域で過ごす同世代の友だちと共に学習する中で、同年齢の子どもとの関わりや学び合いを大切にしている。神西小学校側にとっても、毎年交流を積み重ねることで、お互いの立場を認め合ったり、一人一人かけがえのない存在であることに気付いたりし、広い視野をもち共に暮らしていくための手立てなど、考えるきっかけになるのではないか、と考えている。また、将来的にも本校の児童、また障がいのある方に対するよき理解者になってくれることを期待している。

中学部～神戸川太鼓「和太鼓に挑戦しよう」～

地域の方を講師に招いて魅力ある授業作りを推進している。その一つは「和太鼓に挑戦しよう」である。本物に触れるという経験を保障することはなかなか難しいが、学校運営協議会委員であり『神戸川太鼓』代表の山根さんが快く引き受けてくださり、昨年度から取り組んでいる。ダイナミックな大太鼓の音やリズムの響きを感じたり、一緒に太鼓のたたき方を教わり、太鼓をたたいてみたりなどしてい

る。さらに今年度は山根さんが作曲してくださった中学部オリジナル曲『虎舞（こまい）』を一緒に作りあげていこうと計画して取り組んでいるところである。

高等部～地域の課題を解決しよう～

高等部には年間を通して見学や交流・営業日などに沢山の地域の方が来校される。また、現場実習をはじめ進路見学や校外学習など、生徒たちが地域に出かけて、地域の方から学ぶ機会も多くある。今年度はさらに、地域との連携を深め、生徒たちが「地域に貢献している」という実感がもてるような取組をすすめている。その中で、ブラジルから移住して来られた滝浪実セルジオさんの話を聞く機会をもった。セルジオさんは、キャッサバというブラジルでよく食べられている野菜を使って、出雲市に住むブラジルの方の就労や生活を支援する取組を進めておられる。日本と違う異文化に触れながら、出雲市が誰にとっても住みやすくするためどうしたらいいか生徒自身が考えたり、どうしたらキャッサバのことを知ってもらえるか考えたりした。地域の課題に目を向けて、情報を収集し、考え、課題解決に向けて粘り強く取り組もうとする生徒の姿を見ることができた。

肢体不自由部門～大月箏教室へ校外学習に行こう～

肢体不自由グループ小学部５・６年生では、大月箏教室をご夫婦でしている大月さんご夫妻を訪問した。初めて触れる箏の弦や演奏の音色に耳を傾け、本物に触れ、非常に貴重な経験をすることができた。こうして地域の方との触れ合いを通じて子どもたちが沢山のことを感じ、学んで成長していく姿が今後の生活を豊かにすることにつながると感じた。

寄宿舎の取り組み～地域ゴミ拾い活動

寄宿舎の行事は希望者が自分のやりたい活動を選んで参加している。その中で毎年、神西地区のゴミ拾い（年４回）を計画している。神西地区について知ったり、地域の方と挨拶をしたりすることで、地域とのつながりを実感することができ機会となっている。地域のために働き、きれいにし、地域の方からお礼をいっていただくことは、自己有用感や満足感・達成感につながった。

みらい分教室～神西湖でのシジミ漁体験をしよう～

みらい分教室は、隣接の児童心理療育センターみらいに入所している児童生徒が通学する分教室である。みらい分教室の児童生徒は生き物が大好きで、今年度も神西コミュニティセンターや漁協の方のご協力を得て、夏には神西湖でのシジミ漁体験をした。実際にシジミ漁の様子を見学し、実際に自分たちでも採ってみた。シジミやシジミ漁について漁師の方に質問をしたり、採ったシジミを料理したりした。また、地域の自然環境や特産品についても、直接話を聞き沢山のことを学ぶことができ、貴重な体験となった。

雲南分教室～地域をきれいにしよう～

雲南分教室には体育館や校庭がないため、体育のときには、いつも近くの斐伊体育館とグラウンドを使っている。そこで毎年、感謝の思いを込めてグラウンドの除草作業をしている。自分たちができそうな身近なボランティア活動について考え、社会のために役に立つ体験をしながら、自他が共に価値ある

大切な存在であることに気付くことにねらいをおいている。今年は、体育館内の掃除も追加し、２グループに分かれて取り組んだ。生徒たちは、手を止めることなく草を抜いたり、窓ふきなどの掃除をしたりして、グラウンドや体育館をきれいにすることができた。この活動ではきれいになった成果が見えやすく、友だちの頑張る姿を見ることで自分も最後まで頑張ろうという気持ちをもち、達成感を得ることができた。

邇摩分教室～仁摩地区のことを知る、知ってもらう～

邇摩分教室は邇摩高校の敷地内にあり、邇摩高校生とは様々な行事を通して交流をしている。学校周辺を探索し、地域の資源や気になる場所を自分たちでまとめることでより深く地域の良さや自然環境を知ることができるし、お世話になっている高校の先生や地域の方に知ってもらう機会にもなる。昨年度は文化祭や和太鼓体験等で交流を深めた。

大田分教室　小学部～分教室神楽に挑戦しよう～

大田市立第二中学校と、毎日の掃除や体育祭・文化祭などの行事交流などを行っている。今年度、小学部では、地域の神楽社中の方に来ていただき、分教室神楽に挑戦した。神楽が大好きという児童が多いことから、自分たちで工夫して作った道具を使い、自分たちで演じたり演奏したりし、地域の方の協力を得ながら分教室神楽を作ろうと意欲的に取り組んでいる。

大田分教室　中学部～私たちの SDGs～

中学部は、年間を通して SDG s の学習に取り組んでいる。これまでの学習を活かしながら、海岸清掃や SDG s 製品作りなど、継続して行ってきている。今年度は、自分たちで海岸清掃をするだけでなく、地域の方にも声をかけ、グリーンカーテンコンテストや SDGs アート・３R 活動・ふるさと学習など学部全体で取り組んだ。生徒一人一人が SDG s の理解を深め、より具体的な行動に移せるようにしたいと考えている。また地域の方と一緒に行うことで、地域の一員であることや、地域に貢献する気持ちを育てていきたいと考えている。

以上の取組は一部分であり、各学部・分教室において地域性や生徒の実態に合わせて年間計画に基づいて実施している。また地域と連携した学習の実施の際には、学習に関わるねらいや個々の目標等について確認する事前学習を設けている。実施後は振り返り、次の学習へ生かせるようにしている。こうして、地域社会と連携協働する教育活動を積極的に行い、様々な人・物・こととつながりながら行い、地域社会の人々と協働して活動する中で、児童生徒たちが社会の一員として豊かな人生を送っていく力になると考える。

４、２年間の実践を通して

校内研修から

人権同和教育課指導主事の訪問指導や、外部講師を招いた研修・公開授業を通して、教職員の人権教育への理解を深め、人権意識を高めることにつながった。校内の研修を通しては、小学部・中学部・高等部・寄宿舎・各分教室の教職員全員で、児童生徒一人一人の人権教育について考え、協議をしてきた

ことが、一人の子どもが入学して卒業するまでの姿を見通した授業作りにつながった。また、公開授業を通して、授業を人権教育の視点で捉え直し、日々の授業の中にある人権の視点に気付く教職員の目を養うことができたと感じている。

各学部・分教室の実践から

学校経営のテーマである「地域」を人権教育の進路保障と関連させ、重点目標を設定したことが、教職員全体で同じ目標をもって取り組むことにつながった。学校経営の重点テーマと、人権教育実践モデル校事業の重点目標を同じ「地域とつながりながら、地域で生きる」としたことで、教職員全体で同じ目標をもち、チームとして同じベクトルで実践できたことはとても意義のあることであった。

まとめ

この事業の取組を通して「地域で生きる人になる」児童生徒を育てることそのものが、児童生徒が生き生きと自分の力を発揮してたくましく生きることを目指す「進路保障」の理念にたった取組であることを実感できた。

またそれは、一人一人の人権が大切にされる「共生社会」に向けた取組にもつながる。今後もこの２年間で学んだことや新たな気付きを生かして、「地域で生きる人になる」児童生徒を育てる実践を丁寧に積み重ねていきたいと考える。